

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	教育実習の思い出 : 国語科
Author(s)	三村, 佳代子
Citation	広大言語 , 7 : 62 - 63
Issue Date	1967-12-18
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046276">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046276</a>
Right	
Relation	



たに浮び強く印象に残っているのはどうしてなのだろうか。

実習に限らず、実際の教師となった場合でも、児童生徒と接触する一時間一時間は決してやり直しのきかないもので、双方にとって、貴重な一時間であり、先生の方では一時間で済むかもしれないが、クラス全体から言えば、一人一時間として、大変な時間がかかっているのであることを思う時、授業を展開する際は、細部にわたって慎重でかつ、周到な準備と綿密な計画が重要だとつくづく感じた。いくら計画が立派すぎても立派すぎることはないのである。

## 「教育実習の思い出」 国語科

三 村 佳 代 子

○ 付属高校にて

「出席簿、ありませんか」（私）「教卓に座席表が書いてあります」（生徒）「座席表？……ああ、ほんと。（このクラス、親切だなあ）」（私）その時間は、気持ちよく始まった。……「じゃあ、山下さん、読んで下さい。」「山下なんていませんよ。下山じゃないですか。下山読めよ。」「おかしいなあ、この座席表、右書きなのかしら」「はい、ありがとう。その次を谷田さん。」「谷田って男ですよ。」「そう？じゃ、谷田クン」「座席表の谷田は赤色で書いてあるのに……」「次を、橋本さん、え？そんな人いないんですか。おかしいですね。（この表、誰が作ったんだろ……生徒の名をうる覚えの教生かしら。困るわあ……）」

こうして「変ですね。おかしいですね。」を繰り返しながら一時間が終わった。授業のあとで、ある女生徒が教えてくれた。「すみません。あの座席表、友達がいたずらしたんです。気づきませんでした？……でも、あれくらい、よくなったうちですよ。以前はもっとひどかったんですから……」

—— 高校二年「現代国語」の時間に ——

○ 付属小学校にて

算数の授業中、計算をまちがえてみんなから見つめられた女の子が泣き出した。最初はそれでも黒板をまっすぐに見ながら、それからついには肩をふるわせて。すぐ後ろに席をとっていた私は、その子の心の内を思うと、たまらなかった。誰でもそんな思いをしたことがあるのではなからうか。……次の時間、その子は元気に隣の男の子に話しかけている。まだ目がはれていた。

理科は“脂肪”についての実験。牛脂を熱しながら、「すき焼きのにおい！」と叫ぶ声。植物

油の原料と聞かされた、菜種・ゴマをノートの上でつぶしている。シミのように浮き出た油を鉛筆で大きく囲んで、横には注がっている。曰く「これはナタネ油。これはゴマ油」

授業を見学し、子供たちを眺めていると、自分の受けた教育があまりにも貧弱だったような気がしてくる。付属の、この施設、この指導でもう一度教育を受けてみたい、と思った。しかし、それはまちがっている、と今は思う。すぐれた先生、熱心な先生はどこにもいらっしやる。自分がそんな先生に教わったということ思い出せないだけなのだ。子供たちが授業に熱中しているようすを、うらやましいと感ずるほど、私の心は子供のそれから遠ざかっている。おとなになるということは、幼ない頃持っていた貴重なものを失なってゆくことのように思える。—— 宙ぶりんの年令。

小学生は教生に対して、批判の目を持っていない。どんな方法でどんなふうに授業を行なっても、それにそのまま従う。いいかげんにすまそうと思えば、それでもすむ。教師の人間性というものが、鏡に映ることく、子供たちに反映する。それだけに小学生を教育することはむずかしい。こわい、と思う。

子供たちの顔と名前、そして性格などがわかってくるにつれて愛着が増してくる。おとなしい子もわんぱくな子も、みんなかわいい。たった一週間の実習だけれど、もうどの子にも、他人とは思えないような親しみを感じる。しかし、また一週間もすれば、子供たちは私のことなどさっぱりと忘れ、私の方でも、思い出の中でのみ子供たちと交渉をもつようになるのかと思うと寂しい。一生の中にはいろんなことがある。この邂逅もそのひとつだと思って、あっさりと忘れてしまふより他にないのか。……小学校は6年間。中学・高校はそれぞれ3年間。毎年毎年、教え子を送り出すことになる。考えてみれば、教師は寂しい職業でもある。

子供たちといふことは楽しい。きどらずにすむ。背伸びをする必要がない。しかし『相手が子供だから……』と軽く考えていることはないか。自分の程度を下げればよい。とだけ考えてはいはしないか。程度を下げて、ほんものの子供になれはしない。どこかにオトナの心が残っている。そんな心から不用意に発したことばで、あるいは態度で、知らぬまに子供たちを傷つけはしなかったらうか。子供たちに甘えすぎているのではないか。とも思う。自分へのきびしさが足りなくなかったか。反省せねばならない。……教育者になるために生徒に教えてみて、教えられることの方が多かった。

教育実習は、教師になるための訓練期間であるけれど、そこで学ぶものは、単に技術だけではないと思う。それ以外の、人とのふれあいによって教わることのほうが、より大切なのではないかと思ったりする。

—— 私“感想録”より ——